

キリスト教神学における歴史認識

—ラインホルド・ニーバーによる十字架の意味の解釈について—

Views on History in Christian Theology: About Reinhold Niebuhr's Interpretation of the Cross

佐久間 重
Atsushi SAKUMA

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で十字架上のイエスについてどのように解釈しているかを詳述したものである。ニーバーの見解を明らかにすることにより、彼の神学の特徴を明確にすることを狙いとしている。「第二のアダム」としてのキリストという教義は、キリスト教が歴史の現実と深く関わっていることを象徴している。各々の人間は、他の人や集団との調和を求めるが、この際には歴史的な現実よりも深い次元で調和が維持されなければならない。この次元を提供するのが十字架上のイエスのよって示された犠牲的な愛（アガペー）である、とニーバーは強調し、キリスト教の信仰と歴史的現実との関わり方を示している。

This paper deals with the meaning of the cross according to Reinhold Niebuhr's description in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. By showing how Niebuhr interprets the cross, the basis of his theology is also to be described. Niebuhr's interpretation of the cross is summarized as follows: The Christian doctrine of the "second Adam" symbolically shows that Christianity is deeply related to the facts of history. Each person seeks harmony with the other individuals or the group, and on this occasion this mutual love must be maintained in the dimension deeper than historical realities. It is the sacrificial love, namely agape, shown by Christ on the cross that provides this dimension.

キーワード：十字架の意味, 歴史認識, ラインホルド・ニーバー
meaning of the cross, views on history, Reinhold Niebuhr

I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする¹⁾。2004年に映画『パッション』が公開され、審問中のイエスに対する残酷な仕打ちに賛否の意見が出た。特に鞭打ちの刑が余りにも残酷であるとして非難の声が上がった。イエスへの残酷な仕

打ちにこそ、敬虔なカトリックであるメル・ギブソン監督がこの映画に込めた意図が読み取れる。イエスが残酷な仕打ちを受ければ受ける程、イエスが引き受けた犠牲は大きくなり、人間に対する愛の大きさが解かるのである。この点は、キリスト教信仰に対する関心が薄い場合には、なかなか理解が出来ないところである。このイエスの犠牲的な愛について、ラインホルド・ニーバーがどのように解釈しているかについて、以下

ではラインホルド・ニーバーの論述に沿って詳しく紹介することにする²⁾。

Ⅱ. 十字架が明らかにする歴史の可能性

1. 十字架の意味

ニーバーが考えるキリスト教信仰では、歴史に対する神の統治を明らかにするキリストが、人間の本性の規範も現している。このことは、歴史が持つ意味を明確にする。つまり、神は、歴史の中の善悪を判断するが、他方、神は自らの恵みにより人間が罪深い腐敗を克服できるようにする。人間の本性の規範としてのキリストは、歴史における人間の最終的な完成の姿を意味する。これは、犠牲的な愛（アガペー）の完成であるが、人間が歴史の中では容易に達成できないことも示している。

人間が自己の利益を他人のために犠牲にすることは、人生を合理的な歴史という視点でのみ理解される時には不可能である。人生が合理的視点を超越する次元をもつと理解される時に、キリスト教信仰の犠牲的な愛という逆説的な意味が明確になる。イエスが自らに従う人達に約束している報いが「復活」であり、犠牲的な愛は、人間の相互的な愛（エロス）に関連性を持つ。人間は、十字架上の犠牲を倫理上の最高のシンボルとして考えるようになる。人間は、自己よりは他人に関心を払うことが、現世的な利益以上のことをもたらすことを経験からも知るが、このことを一層明確にするのが十字架によって現されたキリスト教の啓示である。

2. 犠牲的な愛（アガペー）

キリストの無罪性というキリスト教の教義を理解することによって、一方向の犠牲的な愛と双方向の相互的な愛という関係が明らかになる。これは、イエスは人間的であり、同時に神的であるということを宗教的にも道義的にも意味あるものにする。イエスは人間的特性をもつのか、それとも神的な特性を持つのかはキリスト教思想の中で度々論争となったものである。

ニーバーが十字架の表す意義を解釈する時の基点は、神の愛（アガペー）が歴史を超越しているということである。神の究極の気高さは、歴史のロゴスを越える自由の中にある。この自由により、神は人間の罪や苦悩に関わる。アガペーは、神の究極の気高さと同時に、歴史との関わりを現していて、人間の最高の可能性を示す。キリストの中にある神的なもの

なものとの関係は、矛盾しているのではなく、一体的なものである。神の究極の気高さと無欲さは、悲劇的な結末の中でその意味を現す。無欲な愛は、歴史的現実の中では持続が困難だからである。キリストの中にある神的なもの

と人間的なものとの対比は、ギリシャ思想にある実体のあるものとなげものとの対照ではなく、神の中にある力と善良さとの対照である。歴史の中で神が善良さを現す時があるが、歴史の中にある争いに神は力を行使することはない。

イエスの究極の完全さを象徴するものとして十字架を理解する時、キリスト教信仰は、それを合理的に説明しようとする見方より深さが出る、とニーバーは言う。キリスト教信仰によれば、エゴとエゴの罪深い争いが超越される点として十字架が捉えられている。多くの神学者達は、この究極の完全さを形而上学的な法律主義的に解釈しようとした。こうした神学がイエスの完全さを形而上学的に解釈する時に強調したこととして、処女懐胎の教義があった。これには困難さがあり、それを補うために聖母マリアの無欠性が説かれた。

ニーバーは、キリストの無謬性に関するプロテスタントのリベラル神学的解釈の一つとして、フリードリッヒ・シュライエルマッハー (1768-1834)³⁾ のキリストの「善良さ」の理解を挙げている。シュライエルマッハーは、イエスは人間と同様にあらゆる点で神から試されたが、罪深いことはことはしなかった、と述べている。これは、聖書にはないことである。そして、試されることは、ある意味で罪を犯したことを意味する。歴史の中にある人物のすべての行為について無謬性を主張することは不可能なことである。

イエスの人生は、自己の意志で自己の生命を管理できなくなる自己否定の行為の中で、最高潮に達する。十字架は、個人のどんな行為よりも愛の完全さを象徴している。つまり、十字架は、正義のあらゆる形を超越するアガペーの完全さを象徴している。十字架は、他の人との調和よりも、神的愛への服従を求める。他の人との調和は、歴史の上で望まれる目的であっても、究極の規範ではない。他方、人間は自然の制約を受けても、全く制約されている訳ではない。人間の精神は、自然条件を無制限に超越する。自分の人生を犠牲にする可能性が常に存在する。この可能性が、自分の人生を失うことは、それを手に入れることに繋がるという確信に結びつく。これを手に入れることは、「永遠」に有効である精神の完全さを手に入れることである。これは、歴史の現在の条件を超えたところで、人

生を測る時にのみ意味を持ちうる。ただし、人生をそうした次元で測るのは、信仰によってのみ可能である。このように、ニーバーは、信仰の意義を強調する。

信仰による完全さを、単純に一つの歴史的事実に結び付けようとするのは、人間を不合理さへと導く。十字架上のアガペーの完全さは、歴史に還元することは出来ない。こうしたことはすべて、信仰という知恵によって理解されるものであるために、知識のある人たちは触れようとしなかった。それでも、十字架が象徴する倫理的な意味は、歴史上の人間の実際の姿を明確にし、歴史上の問題に解答を与える。その意味で、人間の規範となるべき「第二のアダム」としてのキリストという教義は、自然崇拜の宗教と啓示的宗教との中間にある。信仰によってのみ、「第二のアダム」が持つ意味の論理的結論を引き出すことが出来る。

3. キリストの完全さと歴史との関係

ニーバーは、キリストの完全さと歴史との関係を捉えて、キリスト教が歴史をどのように解釈するかを説明している。キリストのアガペーは、神の愛と人間的愛の両方を表していることを認識すると、キリスト教の歴史の解釈の重要な原則が明らかになる。そのために、次の二つのことを考察する。それらは、(一)キリストの完全さと歴史の始まりとの関係、(二)キリストの完全さと歴史の実体との関係である。

(一) キリストの完全さと歴史の始まりとの関係

キリストが人間性の完全な規範であるとする考えは、キリストは「第二のアダム」だとする聖パウロの言葉に表されている。アダムが堕落する前に持っていたすべての徳を、キリストは持っている。キリスト教の神学では、キリストの完全さととの関係で人間生活の理想的可能性を定義する。堕落前のアダムの状態を「完全さ」と「潔白さ」の両方で定義することにより、歴史の解釈に逆説的な特徴が出てくる。原初の善良さは、自由によって破壊されていない生命と生命の調和である限り、潔白さを表す。ここで、ニーバーは、ヘーゲル(1770-1831)⁴⁾の歴史哲学に言及する。ヘーゲルは、原初の善良さは歴史的徳と悪が派生する前の歴史的状態である、と考えた。ヘーゲルによれば、堕落は徳の必要条件であり、罪深い自己主張は自由の下で調和の取れた生活の始まりとなる。また、潔白さは自由のない生活が調和したものとなり、相互の愛は自由のない生活が調和したものとなる。これに対して、ニーバー

は、犠牲的な愛は罪深い歴史の限界を超えたところでの魂と神との調和であり、人間の特質が自己超越にあるということの理由を表すために原初の潔白さというシンボルを使うことは出来ない、と言う。

他方、人間に自由がなくて調和しているという歴史的状态も考えられない。未開社会でも生活が調和していないことは、今日では十分理解されている。未開社会でも個人は集団から開放されておらず、集団の統一が維持されている。未開社会の人間が自由がないと感じるのは、その人間が既に自由の感覚を持っているからである。未開社会の統一の維持には抑圧が出てくる。よって、未開社会には、既に専制的抑圧と無政府的対立の萌芽が含まれている。歴史が創られる所には自由があり、自由がある所には罪悪がある。原始社会の相互依存性は、人と人との愛情関係の見本になっているが、それが正しくはないのは以上のような理由からである。同様なことは、子どもの潔白さについても言える。子どもは、自己認識を発達させるにつれて、自己中心的になる。この様に、子どもは全く潔白であるとは言えない。子どもが持つ二面性は、キリスト教思想の潔白さについての見方を明らかにする。子供の善良さで神の王国で実現されるべき完全さを象徴したが、子供でも罪深い腐敗に巻き込まれ、救済が必要だとしているのが、アウグスティヌス以来の正統派神学者達の考え方である。

キリスト教では、人間の歴史の全体像は、最初のアダムと第二のアダムとしてのキリストという二つの象徴により定義されている。最初のアダムで象徴されたことは、人間の歴史の規範の一部が自然界での生命と生命の調和の中にあるということである。第二のアダムで象徴されたことは、歴史に対する人間の自由を認めようとすることである。しかし、歴史の中で実際に達成されたことは、生命が他の生命に従属させるという悪の汚れを持っていた。よって、歴史の中では、人間は純粋に倫理的である規範を持ち得ない。規範となるべき人間は、犠牲的な愛を持つ神的人間である。キリスト教では、原初の無邪気さのみで人生を解釈することはない。キリスト教では、原初の無邪気さに十字架上の悲劇的な完全さを結び付けた解釈が行われている。

(二) キリストの完全さと歴史の実体との関係

キリストにおける歴史の意味の開示が歴史についての一般的な見方に対して持つ意義として、ニーバーは、

次の二つを指摘する。第一は、キリストにおける歴史の意味の開示が、歴史についての一般的な意味の不完全さを補うということである。第二は、歴史の意味に対する感覚を研ぎ澄ますし、人間の歴史解釈の過ちを正すということである。

第一の意義は、十字架によって象徴された犠牲的な愛（アガペー）が人間の倫理観から出てくる相互的な愛（エロス）の不完全さを補うということである。相互的な愛は、自己を視点とした人との関係付けであるために、絶えず阻害されることがある。ニーバーは、この点をデイヴィッド・ヒューム（1711-1776）⁵⁾の論述を使って明らかにする。ヒュームは、相互的な愛の可能性を論じ、その愛により人類が一つの家族のようになれる、と言う。しかし、ヒュームの主張に欠けている点としてニーバーは、犠牲的な愛と相互的な愛との間にある関係を理解していなかったことを指摘する。ヒュームが社会的な道徳として、人間が他人と可能な限り最高の調和を求めなければならないと述べていることは正しいが、歴史の中に存在する相互的な愛は、社会的な利益を冷静に計算することで出てきている、ということをヒュームは理解していない、としている。歴史の中には、同胞愛によって確立された組織がいくつかあるが、これらは神の意志への服従によって可能となった。より普遍的な同胞愛を確立するためにアガペーを歴史の中での同胞愛の根底とみなしている点で、ルネサンスや啓蒙思想、さらには社会的なリベラリズムやキリスト教のリベラリズムの見方は正しい。人間の自由は、同胞愛への制約を取り払おうとするからである。アガペーは、歴史の中にある可能性と矛盾するものではない。あらゆる社会は、社会の安全の要素としてアガペーの原理を取り入れている。

第二の意義は、歴史の意味に対する感覚を研ぎ澄ますということであるが、これにより、人間の歴史を解釈する時に、超越的な規範を単なる可能性とみなす過ちを防ぐことが出来る。ニーバーは、この過ちをキリスト教の偏った見方や、ルネサンスや啓蒙思想などの世俗的な考え方の中に見出している。特に、アメリカのキリスト教のリベラリズムや、マルキシズムの中にこの過ちを見ている。キリスト教の偏狭的な人たちは神の恵みを神聖化し、世俗的なリベラリスト達は普遍的な教育の力を過大評価し、マルキスト達は社会の再構成をめざし、相互的な愛と犠牲的な愛とが合致する程に人間生活を引き上げられると信じた。形式的な平等から真の平等を目指したレーニンの主張は、「神の

王国」の世俗版である。レーニンの考えの根底には、罪深い利己主義は、社会の階級に起因するという見方があった。世俗的なリベラリスト達は、普遍的な教育により各々の人間が他人の利益を自分のものと同様に考えられるようになる、とした。浅薄なキリスト者たちは、神の恵みにより現実の罪悪を打破できると考えた。

こうした過ちに対して、深遠なキリスト教信仰は、十字架のシンボルは相互的な愛が歴史の本質を変えることが出来ないことを明らかにしている、とニーバーは述べている。十字架は、歴史の可能性と限界を明確にしている。人と人が関わる時は、自己犠牲が難しくなる。十字架は、人間の善性とはかけ離れた究極の善性を象徴している。歴史的現実、自己主張と罪深い愛の融合の現実である。この点が、近代の歴史の解釈で曖昧にされた歴史の側面である。

4. キリストの完全さと永遠との関係

ニーバーは、「第二のアダム」としてのキリストという教義により、ロマン主義や進化論的楽観主義や神秘主義のそれぞれの主張を論破している。その一つとして、マイスター・エックハルト（1260-1328）⁶⁾の説く神秘主義に言及する。人生の目標がアダムの潔白さとは関係付けられず、創造の前あったとされる統一状態に設定されている。合理主義や神秘主義的な考え方の一つの傾向として、永遠を沈思黙考することが歴史の中での完全さであるとして捉えることがあった。アリストテレスやプラトンの影響を受けた中世のキリスト教では、愛の実践よりは沈思黙考が尊重された。つまり、アガペーよりはグノーシス（霊的知識）が究極の目標とされた。肉体化されたロゴスである「第二のアダム」というキリスト教の教義は、歴史からの逃避に反対する。人間は、自由のない統合体でもなく、活力のない自由でもない、とされている。自然の限界の中でも、神の中に究極の完全さを見出す自由を人間は持っている。神は、永遠の無欲さの中ではなく、苦悩する愛の中で神聖さを現す、とされている。新約聖書が規範とする道徳的完全さは、思想が行動を超越する時ではなく、犠牲的な愛が相互的な愛を超越する時に達成される。キリストが歴史を超越するのは、思想によってではなく、行動によってである。歴史の中でキリストは行動し、歴史を超越した。

キリスト教における愛の概念は、非常に大きな権威を持って来た。神秘主義者や合理主義者は、この愛を

神に対する愛として解釈するために、キリスト教の正統派が反駁するのを困難にしている。神秘主義や合理主義では、神の愛が歴史における同胞愛や共同体愛でもあることが理解されない。その例として、ニーバーが挙げているのが中世カトリックの神秘主義者である「十字架の聖ヨハネ」(1542-1591)⁷⁾の論述である。彼は、隣人への愛を神の愛から除外したが、これはキリストの愛の解釈と矛盾する。また、神秘主義者は、被造物の善良さを曖昧なものにし、人間の究極の完全さを神聖さへの融合と同一視した。

ニーバーは、自らの論理の弁証法的特質を聖書によって強固なものにしている。聖パウロは、信仰心の深い人であれば、どんなに低俗な職業についても、それに価値ある生活が送れる、と説いている。すべての人間の中に一人の神、父がいる、としている。聖パウロは、歴史とキリストの完全さとの関係についての聖書の概念を述べている。この概念は、歴史の規範を余りにも単純に歴史の中に置く理論や、永遠の完全さを歴史とは無関係なものとする理論によって絶えず脅威に晒されている。こうした神秘主義的な異説は、逆説的に、キリストの愛についての概念がキリスト者の生活の中でどのくらい大きな意味を持っているかを明らかにする。キリスト教の啓示で示される神は、世界から切り離されている訳ではない。人間にとっての最高の完成は、神の意志の下で、自由な自己が自由な他人との愛の調和を達成することである。

Ⅲ. おわりに

ニーバーの論述を要約すると、次のようになるであろう。「第二のアダム」というキリスト教の教義は、キリスト教が歴史的現実によく対応していることを表している。潔白の状態を有史以前の状態に対応させると、すべての生命が調和していた状態が考えられるが、ここでは、どの人間も集団も歴史的過程に対する自由を持っていないことが解かる。他方、人間が全く自然のままの状態にあったことはなく、潔白であったこともないことも明らかである。人間の自由が拡大するにつれて、善悪も大きくなり、個人や集団は他を犠牲にして自らの安全を得ようとして来た。自由が拡大すれば、人間社会の中により大きな同胞愛に基づく機構を作り出せる。この同胞愛に基づく人間関係が生活を律する法にもなる。この場合、人間の精神の自由が重要になる。同胞愛が大きくなるにつれて、他を支配しようとする腐敗も生じる。この同胞愛の腐敗は、愛の法

とは対照をなすものであり、この腐敗を取り除くような歴史的発展はまだ生じていない。そのため、愛の法はまだ歴史の規範にはなっていない。

人間は、歴史的経験から個人や集団が他との調和を求めて社会的対応を図って行くが、この相互的愛の対応は、歴史のより深い次元からの視点がなければ維持できない。この次元を提供するのが十字架上で現された犠牲的な愛(アガペー)である。アガペーは、歴史的な正当化を求めない。他者への関心が相互的な反応を求めない限り、実際の歴史の中でもアガペーが生きて来る。自然の中にある人間の問題を厳密に検証すると、人間の精神の自由によって、歴史はそれを超えたところを目指すことが明らかになる。しかし、キリストや十字架が明らかにする目標は、人間が歴史的に経験したのではなく、信仰によって得るものである。キリストの啓示は、倫理の視点からすると愚かに見えるところもあるが、啓示を受け入れると、歴史の中にある倫理の問題を正しく解釈出来る。啓示により、人間は自らの経験の中にある二つの要素を正しく把握出来るようになる。その第一は、人間は生存への衝動を持つことであり、第二は、その衝動が人間の倫理の中で支配的な役割を果たすことに対して良心的呵責を持つことである。

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第三章を中心にして、イエス・キリストを介した歴史の意味についてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学とはどのようなものなのか、また、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は紹介出来たと思う。ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後とも続けて行くつもりである。

注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, ーラインホルド・ニーバーにとっての歴史の意味ー, 名古屋文理大学紀要, 第6号, 21-27 (2006) 参照。
- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, II*, Charles Scribner's Sons 25-67 (1943) を参照。
- 3) ドイツの神学者。神学は敬虔の体系としての実証的学問であるとし、神学に科学的な手法を応用しようとした。
- 4) 近代ドイツの最大の哲学者と言われている。歴史における理性の内在という歴史哲学を確立し、マルクスなどに影響を与えた。

- 5) イギリスのスコットランド出身の啓蒙思想家で、人間の本性について懐疑的になり、社会的正義を論じた。
- 6) ドイツの神秘主義思想家で、トマス・アキナスの主張に従った主知主義的スコラ哲学を確立した。
- 7) スペイン生まれで、カトリックの反宗教改革の中心人物となった。物質との関わりから遠ざかり、神に合一することによる魂の成長を説いた。